

ひとを結ぶ。  
まちを結ぶ。  
地域おこし協力隊

column  
No.89

大都市圏から地方へ人の流れを作り、将来の定住を目指しながら、地方の活性化への貢献を目指すプログラム「地域おこし協力隊」。市で活動する6人の隊員たちの活動を紹介します。  
【問】市観光課（☎77・8563）



【写真2】おどりやま、らんかんばし下



【写真1】萩の前にて椿原小路裏

今回紹介するのは、袋町にお住いだった小野家のアルバムに収められていた戦前の舟遊びの写真です。このアルバムには同じ日に撮影された4枚の舟遊びの写真が収められていて、今回はこのうち2枚を紹介いたします。2枚とも年代ははっきりとしませんが、昭和初期の写真とと思われます。

【写真1】には、アルバムの台紙に「萩の前にて椿原小路裏」と記されています。堀岸から撮影された写真には、掘割の水面に向かって枝垂れた萩の花を背景に、家族7人で舟に乗り込んでいる様子が写されています。舟には風呂敷に包んだ重箱も載せられています。キャブションや風景から、場所は細工町から瀬高門水門（城塞水門）までの間で、現在の川下りコースの掘割と考えられます。

【写真2】には「おどりやま、らんかんばし下」と

## 舟遊びの情景

市史編さん係 白石 直樹

記されています。三柱神社の欄干橋を渡る「おにぎえ」の踊り山を、舟から見物している様子が写っています。2枚の写真から、この舟が三柱神社の秋祭り「おにぎえ」を見物するためのものであったことが分かります。また、今回紹介しない別の写真では、【写真1】に写っていた重箱を開け、舟上でお弁当を楽しそうに食べている家族も写っています。

現在のような業者による観光客向けの川下りが定着するのは昭和30年ごろ。しかし、それ以前にも地元の住民は舟に乗って掘割を遊覧していました。江戸時代には、武士を中心に納涼や月見、そして祭礼見物などを目的に、それぞれの屋敷から舟に乗り込み、水門を出て、三柱神社辺りまでこぎ出すのが定番でした。この写真は、そうだった江戸時代の風習が戦前期まで残っていたことを物語っています。



日吉神社のしめ縄

## 見えない仕事を知ること 柳川の手仕事

新聞で「しめ縄作りの担い手募集」という記事が目にとまりました。話を聞くと70代の2人が中心となって日吉神社のしめ縄作りをしているとのことでした。普段目にする当たり前の光景は、このような見えない仕事によって支えられていることを改めて感じました。

しめ縄用のワラは手植え、手刈りしたそうです。米作りを含めて、約1年がかりの大仕事です。地域で若い人が減少する中、地域行事や文化の継承が難しくなっている話をよく聞きます。見えない仕事をたくさん知ることによって伝統文化の継承や認知度を向上させるアイデアが生まれるかもしれません。地域おこし協力隊として何かお手伝いできることがあるかもしれませんので、気軽にご連絡ください。連絡先はこちらです。e-mail: yanagawa.yokoyama@gmail.com

日吉神社にお越しの際は、少し上を見上げて、作り手の想いを感じていただくと幸いです。



横山 真平 (35歳)

【プロフィール】市観光課に所属。観光プラットフォーム構築を担当



柳川よかもんで販売中のインク

## 売れ行き好調、最強夫婦の 万年筆インク

前回のコラムで、立花宗茂と間千代をイメージした万年筆インクが完成したことを紹介しました。そのインクを1月中旬から御花の売店「お花小路」で販売しています。インクメーカーがSNSで販売告知をしたこともあり、売れ行き好調です。そのため、当初予定していた売店での販売に加え、ネット通販でも購入できるようになりました。また、2月から柳川よかもん館でも販売を始めています。万年筆のインクというと敷居が高く感じる人もいますが、色はカラフルで種類も豊富。宗茂のインクは銀色のラメが入っているんです。字を書くだけでなく、絵を描くときなど、自由に楽しんでいただければと思います。このインクをきっかけに、柳川のことや宗茂と間千代のこと、そして柳川が大河ドラマ招致活動を頑張っていることなどを全国の人に知ってもらえると嬉しいです。



万年筆インク



楠田 千佳 (45歳)

【プロフィール】市観光課に所属。柳川プロモーションを担当